

インタビュー要録

実施日：2025 年 5 月 2 日（木）13:00～13:30

場所：Zoom

出席者：

・池田 朋弘 氏（Workstyle Evolution）

聞き手：

三柴 丈典（近畿大学法学部 教授、調査班代表）

島崎 敢（近畿大学 生物理工学部 准教授）

弊社では、様々な業種の企業（行政機関を含む）の AI 導入等にかかるコンサルティングを行っている。業種の幅は本当に広い。対象は大企業が多く、中小企業でも適応するし、むしろ潜在的ニーズは大きいと思うが、現段階ではまだ AI を活用できる人材に乏しいため、活用が進んでいない状況と察せられる。現段階では、企業等のうち 1-2 割が本格的な導入を図っており、顧客はそうした企業が中心になっていると感じている。

1. 現段階での AI 活用の状況

現時点での AI 活用は、議事録作成、翻訳、プログラミング支援など、アシスタント的な用途が中心である。業務全体を AI に任せるような事例はほとんど見られず、活用の深度はまだ浅い状況にある。AI の能力自体は高まり、アイデア創出なども可能となっているが、人間側がその機能を引き出せていない。主な課題は、AI への指示の出し方が理解されていない点にある。今後は、AI の能動性や自律性が向上し、指示がなくともタスクを処理できるようになることが予想され、期待される。

実際、特定条件下での自動化は既に進んでおり、弊社でも一定の導入がなされている。また、弊社の顧客に対する営業戦略としても、利用の敷居を下げ、広く浅い導入を促進している。一方で、メールの代筆のような特定の用途では、既に相当程度 AI 化が進んでいる状況である。

2. 活用上のメリットと課題

メリット：

AI による業務効率化が進んでいる。また、活用が上手な人物にとっては、AI が相談相手となり、精神的な支えとして機能することもあり、人に相談しにくい内容でも AI には話せるケースがある。

課題：

AI の出力結果に対するファクトチェックの困難さがあり、内容を鵜呑みにすると問題が生じる。たとえば議事録のような情報も、単に客観的にまとめるだけでは不十分で、人間の意図や思いを反映させる必要があるため、最終的なアウトプットには人間による補正が不可欠である。AI への対応策として、クリティカルシンキングが重要であり、教育の間でもその必要性を伝えている。

将来的に AI が自律性を高めてエージェント化すると、ルーティン業務の大幅な削減は可能になるが、人間の仕事機会が減ることで、特に若年層の技能訓練の場が失われる懸念がある。中長期的視点での人材育成が困難になる可能性もある。

3. 安全面・健康面・心理面の課題

製造業など一部を除き、AI 使用による物理的な危険はほとんどない。ただし、業務上の誤認識や誤作動などが広義の安全面におけるリスクとなり得る。健康面に対する影響は現状ほとんど見られず、心理面についても、上手に活用すれば相談相手としてのメンタルケア的な利点もある。

一方で、AI が自律的に動くようになると、人間の関与が減り、誤った情報の拡散や残存が生じるリスクがある。また、AI に主導される形になると、仕事のやりがいや達成感が損なわれ、心理的ストレスの増加も懸念される。

現状では、AI リテラシーが高い人物に AI 関係業務が集中しやすく、その人を中心にプロンプト設計などが行われる傾向がみられる。今後もこのような特定人材への依存と、その影響力の拡大は続くと予想される。

4. 上記課題への対応

明確な「答え」は存在しないが、人材教育が重要な鍵となる。特に、人間が AI から指示されるような未来に備えて、AI の扱い方のみならず、人間固有の能力—主体性・自律性・創造性・対人コミュニケーション—のリスクリテラシー教育が必要とされる。ただし、教育にも限界があるため、適性のある人が生産を担い、それ以外の人にはベーシックインカムで生活保障するなどの社会的対応が求められる可能性もある。

5. 今後の活用に関する展望

AI を効果的に活用できる人を中心に、今後も利用の拡大は進むと考えられる。業務効率化や利便性の向上が進む一方で、AI に対する過度な依存により、人間が AI に「使われる」リスクについては十分な警戒が必要である。